

収穫後からのキウイフルーツかいよう病対策

キウイフルーツの収穫が終わると、いよいよキウイフルーツかいよう病対策の本番です。薬剤防除を徹底するとともに、枝や幹などにかいよう病特有の症状が発生していないかを十分に観察して、適切に対処しましょう。

[キウイフルーツかいよう病とは]

キウイフルーツかいよう病の原因となる菌はバクテリア(細菌)です。葉では気孔や傷口、枝では傷口から侵入します。主な症状としては、葉の斑点、蕾・花の枯死、枝枯れ、樹液の漏出等があり、発病すると収量や品質の低下、樹の枯死の原因になります。なお、感染した樹の果実を食べても人体への影響はありません。



葉の斑点



蕾・花の枯死



枝枯れ



樹液の漏出

[秋からは感染しやすい時期]

キウイフルーツかいよう病の原因となる菌は、比較的低温を好みます。そのため、主要な感染時期は、①〔収穫後(11月頃)～発芽前(2月頃)：主枝や枝幹への感染〕と②〔発芽期(3月前半頃)～開花期前後(5月後半)：葉や新梢、花蕾への感染〕とされています。

これから主要な感染時期となることから、防除が必要となります。しっかりとかいよう病対策を行いましょう。

[ほ場の衛生管理]

対策としては、ほ場衛生管理を徹底し、病原菌を移動させないことが極めて重要です。
次の「ほ場衛生管理の主要項目」を徹底しましょう。

【ほ場衛生管理の主要項目】

- ①不用意に園地内へ入ることを禁止する看板を掲示する。
 - ②園地内に入る前に「靴」を消毒する。
 - ③園地内に入る前に「手」を消毒する。
 - ④剪定ばさみやノコギリは樹ごとに消毒する。
 - ⑤管理器具は園地毎に決め、消毒して使用する。
 - ⑥収穫カゴやキャリーに植物残渣を混入させない。
 - ⑦園地を移動する前に服、帽子、靴についた植物残渣や土を取り除く。
 - ⑧発生園で作業した場合には、そのままの服装で他の園には行かない。
- *靴底や管理器具は 200ppm(有効成分 5%で 250 倍)以上の次亜塩素酸ナトリウムあるいは 70%エタノールで消毒。
- **手は 70%エタノールで消毒。手袋を使用している場合は、園地ごとに交換。

[防除の徹底]

収穫後は、キウイフルーツかいよう病の病原菌の活動に好適な低温になるだけでなく、落葉痕や剪定の切り口など、菌が侵入しやすい傷口が多く発生するため、薬剤の散布が必要です。特に、収穫後、落葉後、剪定前後や新梢伸長時期の薬剤散布を徹底しましょう。また、強風雨や降雹等で樹が傷ついた場合も散布しましょう。散布する薬剤は、表を参考にしてください。

品種によっては、一部の農薬の使用が自主規制されておりますので、農薬の使用にあたっては、関係機関に確認してください。

表 キウイフルーツかいよう病に対する登録薬剤と主な使用時期

時期	薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数
収穫直後から 発芽期まで	IC ボルドー66D	25～50 倍	収穫後～発芽期	—
	コサイド 3000	2,000 倍	収穫後～果実肥大期	—
	カスミンボルドー	500 倍	休眠期	4 回以内
	銅シン水剤	500 倍	休眠期	4 回以内
発芽後叢生期	カスミンボルドー (クレフノン 200 倍加用)	1,000 倍	発芽後叢生期(新梢 長約 10cm)まで	4 回以内
	銅シン水剤 (クレフノン 200 倍加用)	1,000 倍	発芽後叢生期(新梢 長約 10cm)まで	4 回以内
	コサイド 3000 (クレフノン 200 倍加用)	2,000 倍	収穫後～果実肥大期	—
4 月中下旬 以降	アグリマイシン-100	1,000 倍	落花期まで	3 回以内
	アグレプト水剤	1,000 倍	収穫 90 日前まで	4 回以内
	マイシン 20 水剤	1,000 倍	収穫 90 日前まで	4 回以内
	カスミン液剤	400 倍	収穫 90 日前まで	4 回以内
	コサイド 3000 (クレフノン 200 倍加用)	2,000 倍	収穫後～果実肥大期	—

*各薬剤の登録内容は、2015 年 8 月 31 日時点

[こんな症状があったら切除]

今年は、1 月末頃から、キウイフルーツかいよう病菌を含む樹液の漏出が認められました。かいよう病に罹病していない健全な樹であれば樹液は透明ですが、かいよう病に罹病すると樹液の中に菌泥が含まれ、樹液の色は白濁したり、赤褐色になります。このような症状が認められた場合、病気を広めないために、すぐに薬剤散布を行うとともに、発病部位を切除します。かいよう病は雨や強風で伝染するので、切除は雨天や強風時を避けて行いましょう。切り口は、癒合剤（トップジン M ペースト）を塗布し、保護しましょう。



菌泥を含む白濁色樹液の
落葉痕からの漏出
(2015/01/28)



菌泥を含む赤褐色樹液の漏出
(2015/01/27)

伐採や剪定で発生した残渣は、園地内で表層から五〇センチメートル以上の深さに埋設あるいは専用施設において焼却することが望ましいとされています。難しい場合には園地内等に敷いたビニールシート上に残渣を置き、上面をシートで覆って少なくとも二〇週以上の期間放置（ニュージーランドにおける防除指導による）します。海外ではキウイフルーツかいよう病菌が長期間枝の中で生存していることが確認されています。この期間内にシートがめくれたりして病原菌が飛散しないよう注意してください。

もし、「キウイフルーツかいよう病かな??」と迷ったり、「切除したいけど、どこから切除したらいいかわからない」、といった場合には、お気軽に果樹試験場病害虫研究担当にご相談ください。

キウイフルーツかいよう病は、まず発生させないこと。もし発生した場合は少しでも早く、適切に対処することが大切です。日ごろからほ場の点検をこまめに行い、ほ場衛生管理や薬剤散布を徹底しましょう。

農林水産省のホームページに「キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の当面の防除対応マニュアル（暫定版）」がありますので、そちらも参考にしてください。